

『タイムマシン』原作小説(1895)と映画(2002)の人種的表象について

はじめに 『タイムマシン』は原作と映画(今回の発表で扱うのは 2002 年版)で異なる点が非常に多くある。本発表では、その相違点の中から、①エロイとモーロックについて、②黒人キャラクターについての 2 点を取り上げ比較する。

①エロイ族とモーロック族

【外見の比較】

	原作	映画(2002 年版)
エロイ	肌は白、金髪、美しい	肌は褐色、髪は黒
モーロック	肌はくすんだ白、髪は黄 あごのない青白い顔 ピンクがかかった灰色、または緑がかかった赤	肌は灰色、髪は白っぽい灰色 上向きの鼻、筋肉質 小さな茶色い瞳

原作で、エロイの外観が分かる描写はいくつかある。

“…and surrounded by an eddying mass of bright, soft-coloured robes and shining white limbs, …”

「…あたりには、柔らかいものをまとって肌も生白い、華奢で小作りな未来人が大勢…」

“…but presently a fair-haired little creature seemed to grasp my intention and …”

「…そのうちに、小さい中でも特に小柄な金髪の 1 人がやっと私の意図を察して…」

原作はエロイ族(以下エロイ)とモーロック族(以下モーロック)はともに白人であり、作中登場する非白人はほぼいない。映画では、エロイ族が非白人となっているが、これは「ポリテクナル・コレクトネス」が一般化した時代に合わせ、人種比を工夫した結果と考えられる。

【役どころの比較】

「階層」 原作は、富裕階級と下層階級が完全に二分化された結果、富裕階級はエロイ、下層階級はモーロックになったとされて、どの階級も白人であるとされる。一方映画では、地球環境が破壊された結果、ウーバー・モーロックという上層階級が、「交配者」として、肉体労働に従事するモーロックとエサとなるエロイという 2 つの人種を作りだし、ウーバー・モーロックは人類の「頭脳」として君臨し、「カースト」を作ることで絶滅をまぬかれたとしている。「エロイはモーロックの家畜」という点は原作と映画で共通している。映画は、三つの階級=三つの人種としたところが原作と違う。

「夜の人種、昼の人種」 原作ではエロイは昼、モーロックは夜の人種という対比が色濃く表現されているが、映画は、違うのではないか。というのも、原作では、モーロックは暗闇(地底)に住んでいるうちに光を嫌うようになり、昼に地上に出てくることは決してなく、夜にエロイを狩りに地上に出てくるという設定である一方、映画では、モーロックが昼間にエロ

イを狩りに地上に出てくる場面があるからだ。

②黒人キャラクター

マーラ 映画(2002年版)のヒロインであるマーラは非白人であり、一見すると、黒人ステレオタイプの1つ「ムラトール」に当てはまるのではないかと思われる。ムラトール・ステレオタイプには二種類ある。1つは白人の異性に興味を持ち誘惑する「ずるがしこいムラトール」「誘惑的なムラトール」である。2つ目は白人男性との恋が実らず、不幸な死をとげる「悲劇のムラトール」である。(赤尾 33-34)

マーラの人物像について見てみると、彼女は怪我をしているアレックスの手当てをしたり、エロイ族一般とアレックスの通訳を買って出たりしている。マーラはアレックスのことを助けようとはしているが、誘惑はしないので、誘惑的なムラトールのイメージには当てはまらない。さらに、映画の最後までマーラとアレックスは生き残り、結ばれるため、マーラは悲劇のムラトールでもない。

ホログラムの司書 映画(2002年版)のみに登場する司書のボックス NY-114 は黒人男性の姿をしている。ホログラムであるこの司書はアレックスが2030年の世界にタイムスリップしたときに、彼に情報を与える。さらに、アレックスが80万2701年に到着した時にも、全く変わらぬ姿で現れ、情報を与えることで彼を助けようとする。黒人ステレオタイプの中には超自然的な力を発揮して、みずからを投げうって白人主人公を助ける黒人わき役「マジカル・ニグロ」というものがある。(赤尾 16) このホログラム司書にはマジカル・ニグロの要素があるのではないかと考えられる。

終わりに 原作と映画を比較して言えるのは、まず、映画の筋立てのほうが子供でも分るような単純さ、ということだ。原作では常に主人公自身が現状を解釈・推理して話が進むのに対し、映画はマーラや司書やウーバー・モーロックなど、答えを提供する様々な人種の人物が現れ、主人公とともに映画の観客も自分の置かれた状況や今後の展望を理解していく。

この「答えを提供する人物たち」が様々な人種の人である点が重要である。原作には白人しか登場しないが、映画は、アメリカ社会の多様化を反映し、人物の人種バランスを考えているということである。しかし、その一方で、マジカル・ニグロを思わせる司書が登場するので、映画版でも、完全に黒人ステレオタイプが払しょくされているわけではない。

資料一覧

赤尾千波 (2015) 『アメリカ映画に見る黒人ステレオタイプ』 『国民の創世』 から 『アバター』 まで』 富山大学出版会
H・G・ウェルズ 著(池央耿訳) 『タイムマシン』 光文社古典新訳文庫、2012年

H. G. Wells, *The Time Machine* (1895)

Project Gutenberg [The Time Machine by H. G. Wells - Free Ebook \(gutenberg.org\)](http://www.gutenberg.org/files/19998/19998-h/19998-h.htm)

映画 *The Time Machine* (2002) JAN: 4988135538543